

中国残留日本人孤児から学んだこと(第11回)

ボランティア・市民運動の歴史と反省：1981～2000年

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2019年9月号掲載記事に若干加筆しました。

残留孤児を支援するボランティア・市民運動の歴史は、大きく3期に区分される。

今回は、その中の第1期(1972年～1980年頃)について見た。

今回は、第2期(1981年～2000年頃)のボランティア・市民運動について考えたい。

1981年当時、日本政府は、肉親が身元保証人になった残留孤児だけに日本への帰国を認めていた。いいかえれば、肉親が判明しなかったり、判明しても身元保証人になることを拒否すれば、残留孤児は日本に帰国できなかった。

第2期のボランティア・市民運動は、こうした日本政府の理不尽な帰国制限に異議を申し立て、残留孤児の帰国の突破口を切り開いた。すなわちまず肉親の身元保証人がいなくても、第三者が「身元引受人」になれば、残留孤児が帰国できるように政策を変更させた。また帰国後の生活についても、定着促進センターを設立して日本語教育を実施し、「自立指導員」という制度を設けて生活指導を行うなど、一定の自立支援策を実施させた。そしてボランティアは、自ら「身元引受人」や「自立指導員」、日本語教師に就任し、残留孤児を支援した。

こうしたボランティア・市民運動の活動は、多くの残留孤児の帰国、および帰国後の生活を支えた。今もなお残留孤児から尊敬・感謝される「伝説のボランティア」もいる。兵庫県で代表的人物をあげれば、伊丹市を中心に活躍した故・山城龍氏だろう。

しかし、すべてのボランティアが尊敬・感謝されたわけではない。残念ながら、困ったボランティアも多かったようである。

そこには、3つのタイプがあった。

まず第1は、自分では残留孤児の「父代わり・兄代わり」のような気分でいて、自分が信じる「日本の常識」を頭ごなしに押し付けたボランティアだ。彼らの多くは、日本敗戦直後に「満州」から引き揚げて来た人々で、中には中国に駐留していた元軍人もいた。彼らは、「膝まで頭をつける日本式のお辞儀」の練習を強制したり、「生活保護を受けるのは恥だ。早く自立しろ」と言って病気に苦しむ残留孤児をむりやり就職させた。

「中国人は劣等民族だから、中国の文化を捨て、早くまっとうな日本人になれ」と熱心

に指導した指導員もいる。言うなりにならない残留孤児の日本国籍を無断で抹消し、無国籍状態にしてしまった自立指導員さえいた。いずれも、本人に悪気はない。「残留孤児のことを思えばこそ、厳しく指導した」と思い込んでいたようだ。

第2に、中小零細企業の経営者の中には、低賃金労働力の確保を目的に「身元引受人」になった人もいた。残留孤児を、事実上の外国人労働者として自分の工場で働かせたのである。残留孤児も日本で就職して自立でき、自分の工場の人手不足も解消できて、共存共栄というわけだ。しかし実際には、残留孤児は自由に転職することも許されず、劣悪な労働条件で酷使された。中には、宿舍としてあてがわれた部屋のリフォーム代や「身元引受料」を毎月給料から天引きされ、最低賃金以下で何年間も働かされた残留孤児もいる。こうしたボランティアにも悪気はない。彼らは「帰国できなくて困っている残留孤児のために身元引受人になってあげ、しかも帰国後の職場まで紹介してあげたのだから、感謝されこそすれ、恨まれる筋合いはない」と思い込んでいた。

第3に、一部の日本語教師は、「言葉と文化の壁」を過剰に重視した。それが自分の「専門」であるからだ。残留孤児にとって一番の関心事である日本での安定した就労や経済生活基盤の確立は、日本語教師の「専門外」だ。中には自分の狭隘な「専門性」にこだわりすぎて、「まじめに日本語を勉強すれば、いい就職ができる（＝いい就職ができないのは、残留孤児がまじめに勉強しないからだ）」、「差別されるのは、言葉や文化の壁があるからだ（＝差別する人が悪いのではなく、残留孤児が日本語や日本文化を身につけていないから差別されるのだ）」といった本末転倒の発想に陥り、残留孤児を叱咤激励するボランティアもいた。彼・彼女達にも悪気はない。「貧困や差別から抜け出すには、結局、残留孤児自身がまじめに日本語を勉強するしかない」と思い込んでいただけだ。

このような市民運動の熱心な活動にも関わらず——むしろ熱心に活動すればするほど——、残留孤児の不満は徐々に膨張していった。そしてついに2002年、残留孤児の不満は国家賠償訴訟の提訴という形をとって爆発したのである。

ボランティアはともすれば「自分は正しい」「自分は良いことをしている」という思い込みに陥りがちだ。しかし本当に大切なことは、上から目線で残留孤児を「指導」したり、「自立」を促したりすることではない。むしろ残留孤児の人生から歴史や社会について謙虚に学び、残留孤児問題を生み出した社会の変革に向け、一緒に闘うことであろう。